
可哀想なリラ

蜜壱makotO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

可哀想なリラ

【Nコード】

N2413D

【作者名】

蜜壱makoto

【あらすじ】

お願い、お願いよ今際の約束、貴方と私だけの約束。瞬きをも赦さない約束を課せられたウォッチャーの御伽。

「赦しておくれ、リラ。」

大きな白の祭壇の上に綺麗な孤籠中の凋んだライラック。
水も肥料も吸収しなくなった朽ちた軀さえ・・・光の無い僕の眼には美しく映っている。

君は名と別のロゼが好きだと云った。

そう、真紅のロゼだった。

茨からロゼの頸を筆記取りリラ、君の傍に投げ入れた。

覚えているかい？5つの頸だった。

もう君は動かなかったけれど、ロゼの香が軀に染み付き幸せだったろう。

今じゃもう5つの頸は君と一緒に溶けてしまったんだもの。

今際の君の軀からはそれはそれは綺麗なロットロゼの香。

5つのロゼの頸と1つの凋んだライラックの軀の異種生殖。

ジェンダーすら分からぬ籠の中の軀に僕はロジック（倫理）を擬えロゼックと名づけた。

「ロゼック、綺麗なロゼック」

僕は始終拝観していた。

リラがロゼック（軀）になるまでをずっと。

花卉が腐乱し、その溜まりの饅えた香りに幾度と無く嘔び泣いた記憶の欠片。

それすらも片隅に追いやられ朦朧とする意識の中枢に僕は今際の淵に立つ植物。

否、立っている等とおこがましい。籠の前でだらし無く寝そべっている唯のゴミなのだ。
最早力も入らぬ根を、リラ、君のポカリと空いた黒い眦が見ている。
嗚呼・・・、あの青い瞳は先週形を亡くしてしまったのだった。

リラ。

空軽薄な言葉で解されてしまった可哀想な子。

リラ、君は優しい子。

暮無・クレナイ・の洒落着、穢い手で詰られても物静かに笑顔を振りまいていた。

リラ、君は冷たい子。

「貴女の解したとの心算、滑稽ね」と笑顔を振りまいているんだろ
うね。

賢いリラ、氷の様な君の奥底は愚者には到底理解できない。

冷たいアトモスフィアは下手で軽薄な言の葉に拠って白い肌に白粉を塗りたくられ

更に白く、更に素肌が見えなくなってしまう。

君には厚化粧は似合わないのに、綺麗なリラ。

メーキャップはいつ溶けるのだろうね。いつ、溶かしてもらえるの
だろうね。

でもリラ、君はとても愛らしい一面を僕だけに見せてくれた。

「お願いよ、私が死ぬ迄は貴方私を見ていて。お願いよ、瞬きもしないで。」

「お願いよ、私が朽ちる迄貴方私を観ていて。お願いよ、声も出さないで。」

「お願いよ、私が死んだ時貴方私をロゼにして。お願いよ、私を籠に飾って。」

「お願いよ、お願いよ、ロゼの私を一人にしないで。」

「お願いよ、お願い、最後のお願い、ロゼの目の前で貴方の今際を絶対に魅せて」

約束の三日後、リラはロゼックになった訳だけれど。

我侬なアグリーメントを僕は喜んで遂行し、君を満足させた。

祭壇上の白籠に装飾した時、君はとても綺麗ねと衰えた身体を中心に横たえた。

アッシュの髪が床に根を這った時、君は眦を閉じた。

「観ている？」息絶え絶え掠れた声をリラが発した時、「観ているよ」と君を一番鑑賞しやすい場に根を張った。

それから・・・

笑顔で朽ちていった。

それから・・・

笑顔さえも朽ちていった。

僕はずっと観ていた。

スローモーションでハラハラと花弁が堕ちていくのを瞬きもせずに放った機能しない眼球で。

僕の眼はまるで陸上の魚の様に死に、視界は暗々たるものだったが、不思議な事にリラの朽ちる姿は一時停止もバグも無くそのまま海馬が再生して逝った。

嗚呼、愛しい君が永久に見られるというのなら、笑顔の君まで巻き戻してくればいいものを。
今もそれは忠実に続いている。

「ねえリラ、幸せかい。」

「ねえリラ、満足かい。」

「ねえリラ、僕は瞼を閉じて眠りたい。」

可哀想なりラ、君はいつまで一人きりの死化粧モデル。

茨が巻き付くCageの中でロゼと共に腐敗した君、

そろそろ僕も今際から飛び降りたいのだけれど「まだ私は今際の淵よ。赦さない」と

風が鳴らす白骨化した頭蓋に・・・ただただ、僕は目前で赦しを待つ秤。

負けず嫌いなのは朽ちないね、素敵なりラ。

でも・・・君の目はいつ閉じるんだい？

そのポツカリ空いた眼球の無い穴をどうやって。

君はいつ今際から飛び降りるんだい？

僕はいつ今際から飛び降りれるんだい？

君の約束はともじゃないけど難しすぎる。

リラ、綺麗なリラ、心臓をも風に攫われたリラ、リラリラリラリラ。

風の援けを借りて「うん」と一言頷いておくれ。

僕ももうすぐ風に食まれてしまうから。

リラ、お願いだ。

君との約束は破りたくない。

赦して赦して赦して、眠ってもいいよと君が約束を破棄しておくれ。

「赦しておくれ、リラ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2413d/>

可哀想なリラ

2011年1月12日23時31分発行